〈国語〉

再考学習

～交流活動を通して自他の考えを広げ深め，多様な視点から思考し続ける生徒の育成～

大垣市立興文中学校　教諭　柳瀬　和也

概 要

新学習指導要領では，これからの教育として，他者と協働して課題解決を図ったり，複雑な状況変化に対応し考えを再構築したりする力の育成が求められている。国語科においても，交流活動を中心に「主体的・対話的で深い学び」を実現していかなければならない。また，生徒への意識調査から，生徒自身，考えを再構築する交流活動を望んでいることが分かった。そこで，「題材設定と単元構成に関わる工夫改善」「タブレット端末を用いた交流活動」の二点から国語の授業の改善を図り，交流活動を通して自他の考えを広げ深め，多様な視点から思考し続ける生徒の育成を目指した。

「題材設定と単元構成に関わる工夫改善」では，複数の視点・立場から答えが考えられる題材を設定し，単元の中に仲間との交流が中心の時間を位置付けること，「タブレット端末を用いた交流活動」では，タブレット学習ソフトの「情報の共有性」を生かし，自分と仲間の考えをつなぎ合わせ，再考した自分の考えを表現することが特に効果的であった。これらの実践を通して，自分の初めの考えに留まらず，仲間から得た新たな見方・考え方を踏まえ，再考し続ける生徒の育成がなされた。

１．主題設定の理由

（１）学習指導要領の改訂

令和より，改訂された学習指導要領の全面実施が行われている。以下は，改訂の経緯の一部である。

> 人工知能がどれだけ進化し思考できるようになったとしても，その思考の目的を与えたり，目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間の最も大きな強みであるということの再認識につながっている。このような時代にあって，学校教育には，子供たちが様々な変化に積極的に向き合い，他者と協働して課題を解決していくことや，様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと，複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

これを受け，**「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善**を行っていく必要性があることが明らかになった。

国語の授業における「主体的・対話的で深い学び」の中心となる活動が，**仲間との意見の交流の時間**であると考える。そこで，**単元内の交流活動の時間を核としながら，生徒が自他の考えを広げ深め，多様な視点から思考し続けることのできる授業づくり**を行うことで，未来社会を生き抜く生徒の育成につながるのではないかと考えた。

（２）全国学力・学習状況調査と生徒の意識

次に，生徒自身の意識に着目した。

令和２年度の全国学力・学習状況調査における岐阜県の「生徒質問紙調査」の結果を見ると，「国語の勉強は好きですか」という問いに対し，「当てはまる」と答えた生徒の割合は２０．８％であった。これは全国の生徒の割合である２４．６％を下回る結果である【表１】。

（４５）	国語の勉強は好きですか	1,626	2,986	2,260	924
		20.8	38.3	29.0	11.8
		20.9	36.3	29.9	12.9
		24.6	37.1	26.4	11.9
（４６）	国語の勉強は大切だと思いますか	4,424	2,627	548	197
		56.7	33.7	7.0	2.5
		54.6	34.3	8.2	2.8
		59.0	32.0	6.5	2.4
（４７）	国語の授業の内容はよく分かりま	2,560	3,783	1,172	284
		32.8	48.5	15.0	3.6
		27.2	49.7	18.2	4.7
		28.4	49.2	17.8	4.4

【表１：令和２年度全国学力・学習状況調査　結果】

また，後に明らかになったことであるが，令和３年度５月に行われた同調査では岐阜県の回答は１９．６％，そして本校の回答はそれをさらに下回るものであった。

では，どのようにすれば生徒の国語の授業に対する意欲を向上させることができるのか。その答えは，生徒自身の声から見出すことができた。

私は昨年度，現３年生の国語の教科担任をしており，年度末に「国語の授業の振り返り」として生徒に以下のような質問をし，回答を得た。

１．国語の授業の中で，印象に残った教材・授業は何か。
２．国語の授業の中で「もっとしたかった」と思う

ことは何か。

この１．２の質問の回答として，最も多かったのが「交流活動」である。特に２の質問については，実に５３％の生徒が挙げていた。その理由として，次のようなものがあった。

・筆者の考えに対して賛成・反対などを交流し合ったのが楽しかった。（生徒Ａ）
・仲間と議論する授業では，自分では思いつかなかった意見などを知ることができてとても面白かった。（生徒Ｂ）
・班や近くの人だけではなく，もっといろんな人と意見を交流したいと思った。（生徒Ｃ）

こうした生徒の意見を踏まえて考えると，交流活動を通して自分の考えを広げたり深めたりする学習活動を生徒自身が望んでいることが明らかになった。生徒の国語の授業に対する意欲向上という意味でも，交流活動の工夫改善を図っていく必要性がある。

ここで，これまでの国語の授業における交流を振り返ってみる。国語の授業の交流活動の形態としては，ペア交流・小集団交流・全体交流などがあった。しかし，ペア・小集団交流では多様な視点の獲得，という点で物足りなさがあり，かといって全体交流で全員の考えを知ることは，生徒の特性や時間配分を考えた時に難しい場面が多かった【写真１】。

【写真１：昨年度の小集団交流の様子。５人程度での交流が限界だった】

交流活動を核とした授業づくりを行うには，より効率的・効果的な交流の形を考えていかなければならない。そこで注目したのが，タブレット端末（Ｉｐａｄ）である。昨年度よりＧＩＧＡスクール構想の一環として，大垣市内全小中学校に一人一台，タブレット端末が貸与された【写真２】。国語の授業におけるタブレット端末の活用方法として，インターネットに接続した調べ学習や，ドリル形式のソフトでの学習の補填などがこれまでに行われてきた。このタブレット端末を，交流活動に生かせないか，と考えた。

【写真２：タブレット端末を操作する生徒。全員が所有している】

授業支援用のタブレット学習ソフトには，「情報の共有性」という特長がある。例えば，生徒各自が学習ソフト上で作成したカードを，仲間との共有画面に送ることで，全員が仲間のカードを見ることができる。つまり，言ってみればタブレット端末があれば，仲間全員分のノートを見られることになる【図１】。

【図１：タブレット学習ソフトの共有画面。「公開」にすれば自由閲覧が可能になる】

・班や近くの人だけではなく，もっといろんな人と意見を交流したいと思った。

これは先ほど挙げた，昨年度の「国語の授業の振り返り」における生徒Ｃの意見である。タブレット端末を用いることで，この問題を解決し，**多様な視点から思考し続ける機会を生徒に与える**ことができると考えられる。

他者と協働して課題解決を図ったり，複雑な状況変化に対応し考えを再構築したりする力の育成を目指し，生徒が意欲をもって主体的に取り組む。その鍵となる交流活動，特にタブレット端末を用いた新しい交流の形に焦点を当て，次のような仮説を立て，研究を進めていくことにした。

２．研究仮説

様々な視点から考えることができ交流の必然性のある題材設定と，仲間との交流が中心の時間を位置付けた単元構成（１），タブレット端末を活用し，仲間の多様な考えを知った上で再考する交流活動（２）に関わる工夫改善を行うことで，**交流活動を通して自他の考えを広げ深め，多様な視点から思考し続ける生徒を育成することができるであろう。**

この「交流活動を通して自他の考えを広げ深め，多様な視点から思考し続ける」学習活動を，本研究では「再考学習」と表現する。

３．研究内容

研究仮説の中から，大きく「**（１）単元構成・題材設定に関わる工夫改善**」「**（２）タブレット端末を用いた交流活動に関わる工夫改善**」を研究内容として取り上げていく。

（１）題材設定と単元構成に関わる工夫改善
①交流の必然性のある題材設定
②交流活動の時間を明確にした単元構成
（２）タブレット端末を用いた交流活動に関わる工夫改善
①「知る」ためのタブレット端末の活用
②「つなげる」ためのタブレット端末の活用

４．研究実践

（１）題材設定と単元構成に関わる工夫改善

①交流の必然性のある題材設定

昨年度，２年生の国語の授業の中で，次の１．２の問いについて各自で考え，自分の意見を交流する学習活動を行ったことがある。

１．「筆者は亡くなった父親のことを，どう思っているのか（『字のない葉書』）」
２．「男を射殺した与一についてどう思うか（『扇の的――平家物語より』）」

生徒の主体的・対話的な交流，という面で見たとき，圧倒的に２の問いに対する学習活動の方が活発であった。生徒の何を引きつけ，主体的な活動につながったのだろうか。

要因として考えられるのは，**複数の視点・立場から考える余地がある**，ということである。１の問いに対する答えは，（登場人物の心情読解に重点を置いたため仕方ないことではあるが）最終的にほぼ一つに収束していく。それに対し，２の問いに対する答えは人によって正反対になる。このとき「仲間はなぜ反対の立場の意見になったのか知りたい」という意識，つまり**交流の必然性**が生まれ，それが結果的に主体的・対話的な交流につながっていくのである。

そこで今年度，３年生の授業の中で，こうした「自分の立場を明確にして議論する交流活動」を意図的に仕組んだ。その中の一つ，『高瀬舟』での実践を紹介する。

「弟の喉元から剃刀を抜いた喜助についてどう思うか（有罪か無罪か）」

この問いに対する考えをまとめ，その後，全体交流（議論）を行った。以下は生徒の記述の一部である。

【生徒Ｄ】
僕は喜助のしたことは間違っていないと思う。なぜなら，弟が死のうとしたのは他でもない喜助のためを思ったからだ。また，理由はどうあれ血を分けてきた家族に「敵の顔でも見るような」目をされるのは僕だったら耐えられない。

【生徒Ｅ】
僕は刃を抜いたのは良くないと思う。本文から分かるように，二人はとても仲のよい兄弟なので，もし睨んできても「兄を人殺しにしたいのか！」と言えば何も言い返せないのではないか。近所の人を呼び，協力して助けるべきだった。

【生徒Ｆ】
僕は善でも悪でもなく中立で考える。これはいわゆる「安楽死」に関わる問題だが，ヨーロッパ地方では認められているところもあり，命の在り方は自分で決断できるそうだ。ただ，僕は大事なものだからそう簡単に死んではいけないと思っている。だから，善悪で決められない。

このように，自分の立場を明確にし，本文や自分の見聞を根拠にして意欲的に意見を述べることができた。交流後，最終的にどう考えるか聞いてみると，初めの考えに固執している生徒はあまりおらず，「別の立場の仲間の意見で納得できるところがあった」「安楽死とつなげて考える視点はなかった」などの感想があった。**自分とは異なる立場の考えを知りたい，という必然性のある交流を行うことで，多様な視点の獲得につながった。**

②交流活動の時間を明確にした単元構成

国語の授業，特に「読むこと」領域の単元では交流の場は一人読みを行った後の全体交流や，全体交流前のペア・グループ交流が主流である。しかし，これでは読み取りのついでのように感じられたり，生徒によっては不要に感じられたりすると考えられる。

そこで，**仲間と考えを交流し合う単位時間を単元の中に位置付け，単元導入時に生徒にそれを伝える**ことで，仲間との考えの交流に生徒の意識を向けながら単元の学習を進めていくことができると考えた。つまり，「単元の最後に〇〇について賛成か反対か議論します」「いろんな立場からの意見交流をするから，いろんな視点で考えることを大切にしてください」といったことを伝え，**生徒に「交流したい」という意識をもたせていく**のである。「１．主題設定の理由」で述べたように，生徒は交流活動を求めている。それを中心として単元を構成していくことで，生徒の主体的な学びにつながっていくと考えた。

ここで単元『自らの考えを』での実践を紹介する。先述の「交流の必然性のある題材設定」も含め，単元全体で本研究に取り組み，成果を得た実践である。

この単元は，教科書の文章「人工知能との未来」「人間と人工知能と創造性」に関わらせながら，「これからの人間と人工知能との関わり方」について自分の考えをもつことを目標としている。そこでまず，第１時に次のような問いを立てた。

「人工知能と積極的に関わっていきたいか，距離を置いて関わっていきたいか」

この問いに対し，「積極的に関わっていきたい」と答える生徒と「距離を置いて関わっていきたい」と答える生徒の両者が見られ，異なる立場から考え

る仲間がいることを生徒に意識付けることができた。

次に，生徒に単元の流れを伝えた。第２．３時に教科書本文の読み取りを，第４時に調べ学習を行っていく中で，一人一人が自分の考えを形成する。そして第５時でタブレット学習ソフトを用いて共有，第６時で仲間と交流する。こうした見通しを立て，単元の出口である交流活動の場を明確にして単元に臨むことで，生徒は目的意識をもって各単位時間の活動に取り組むことができた。

第６時までの学習活動の中で，生徒から「人工知能を用いることは，明らかにメリットの方が多い。距離を置いて関わりたいという人は，どんな理由なのか」という声が聞こえ，交流活動の時間を心待ちにしている様子が感じ取れた。交流が中心の時間を単元の中に位置付け，導入で生徒に伝えることが，**主体的に単元に向かう意識**や，**異なる立場から思考しようとする意識**を生み出したと考えられる。

（２）タブレット端末を用いた交流活動に関わる工夫改善

①「知る」ためのタブレット端末の活用

国語の授業においてタブレット端末を用いる試みは，今年度がほぼ初となる。そこで，まず操作に慣れるという意味で，仲間の考えを「知る」ことを中心にしたタブレット端末の活用を行った。

一つ目は，授業の終末における「まとめ」の記述をタブレット端末上で行い，全員の提出後に公開することで，仲間の書いたまとめを見られるようにする，というものである。授業のまとめは一人一人がノートに記述して終わり，もしくは１．２人が発表して終わり，ということがこれまでの国語の授業では多かった。しかしこれは，自分の書いたまとめが内容として十分なのかどうか，生徒自身が評価する場があまりなかったと言える。そこで，学習ソフトで各自のまとめを公開することにより，仲間と自分のまとめを比較することで，互いに評価し合うことを可能にした。

二つ目は，「俳句」「読書案内」など，できるだけたくさんの仲間の創作物に触れる機会をつくりたいものを学習ソフト上のカードとして作成するというものである。色付けや画像の挿入が容易であるため，視覚的にも分かりやすい創作物を短時間で作ることができた。そして，全員の創作物がいつでも見られるということで，本実践は生徒にとても好評だった【図２】。

【図２：生徒がタブレット学習ソフト上で作ったカード】

こうした「知る」ためのタブレット端末の活用実践を経て，次に再考学習の中心となる「つなげる」ためのタブレット端末の活用へと移行した。

②「つなげる」ためのタブレット端末の活用

前述の実践は，仲間の考えを「知る」，カードを「見る」ことに留まっており，そこからの自分の考えの深まりがあまり感じられないものであった。しかし，本研究で大切にしていきたいことは，**生徒が自他の考えを広げ深め，多様な視点から思考し続ける**ことであり，そのためには仲間の考えを知ったあと，**再度自分の考えに立ち返る必要がある**。そこで，「自分の考えを表す」→「仲間の考えを知る」→「仲間の考えとつなげあわせながら，再度自分の考えを表す」という三段階で授業や単元を展開していくことにした。三つ，実践を紹介する。

一つ目は，単元『自らの考えを』の前準備として行った「バイオテクノロジーの発展についてどう思うか」の議論である。バイオテクノロジーの発展についてインターネットで情報を集め，それを基に各自がカードを作成する。肯定的な考えの場合は赤色，否定的な考えの場合は青色で色分けし，仲間と共有画面で交流する際，自分と異なる立場の仲間の意見を見付けやすくする。そして，最終的に「自分の考え＋仲間の考え＋再考した自分の考え」のカード束を作成した。以下は生徒Ｇのカード束の内容である。

【生徒Ｇの初めの考え】
（食糧増産・ＤＮＡワクチン等の情報を根拠として）
リスクもあるようだが，その分慎重に研究を続けていけば私たちの生活はもっと豊かになると思う。

【生徒Ｈの考え】
（蚊を絶滅させる研究の情報を根拠として）
技術を用いて害虫を駆除できるということは，技術を用いて人の命を奪うこともできるということではないか。悪用できてしまう技術は研究するべきではない。

【再考した生徒Ｇの考え】
バイオテクノロジーには，医療の技術向上や飢餓問題の解決などのよい面がある一方，技術を悪用し人の命を奪う危険があるなどの悪い面もある。バイオテクノロジーを使っていく私たちは，その危険についてまず知らなければならないし，安全に技術を使うために何ができるかを考えていく必要があると分かった。

このように，自分の考えと，自分とは異なる立場の仲間の考えをつなげて考えることで，新たな視点の獲得をすることができている。また，カードの束

として作成することで，自分の初めの考えからの変容を分かりやすく捉えることができる。さらに，自分のカードが使われることで，仲間の学びの役に立てたという思いをもつこともできた。

二つ目は，和歌の鑑賞の授業の実践である。初めに教科書の和歌の中から一首選び，鑑賞文を作成する。次に，同じ和歌を選んだ仲間同士で鑑賞文を見合い，自分の鑑賞文との相違点を確かめる。そして，最終的に，再考したことと合わせてカード束を作成した。以下は，生徒Ｉのカード束の内容である。

父母が頭かき撫で幸くあれて
　　言ひし言葉ぜ忘れかねつる　　防人歌

【生徒Ｉの初めの考え】
これは，防人として苦しい生活をする男が親からの言葉を思い出してやるせない気持ちを感じている歌である。自分は防人の厳しさから，もう故郷には帰れないと悟っている。親からの言葉を思い出すも，自分の力ではどうすることもできず，最後に感謝を伝えることもできない。そのやるせなさを「忘れかねつる」と表現している。

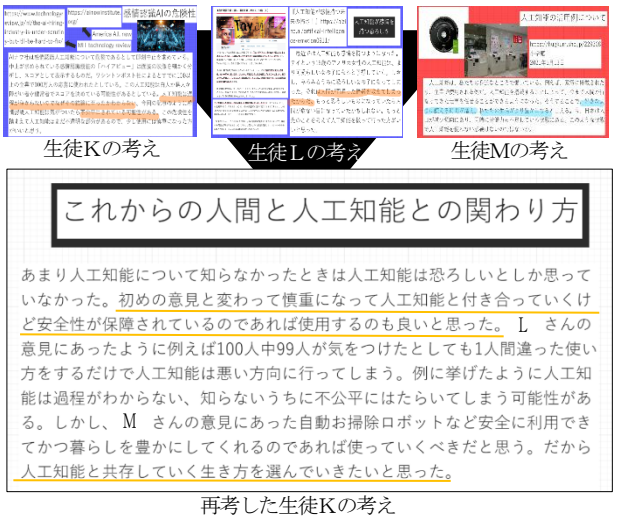
【生徒Ｊの考え】
この歌は，家族と離れなければならない悲しみを詠んだ歌である。両親は遠くへ行ってしまう息子の無事を祈っている。「幸くあれて」「言ひし言葉ぜ」などの東国の方言から，故郷である東国を離れたくないという思いが伝わってくる。

【再考した生徒Ｉの考え】
僕は防人が限界を感じたとき，走馬灯のように言葉を思い出していると解釈したが，Ｊさんは九州に行く途中で言葉を思い出しながら，故郷から離れたくないと感じていると解釈していた。この解釈の違いは，この句自体が表している意味が「親からの言葉が忘れられない」だけである故だと思った。

この授業でも，生徒は多様な視点を獲得し，自分の考えを広げ深めることができた。仲間の考えを知って終わりではなく，新たに獲得した視点をもって，再度自分の考えを形成していく。本研究で目指す，思考し続ける生徒の育成が形になって表れていた。

最後に，『自らの考えを』での実践である。「研究実践（１）」で述べたように，この単元は仲間との交流の時間を単元の出口としており，導入時から交流に向けた生徒の意識付けを行ってきた。第５時までに一人一人が自分の考えを形成するとともに，「別の立場の仲間の考えを知りたい」という思いをもって，交流の時間に臨んだ。

第６時，タブレット学習ソフトの共有画面で同じ立場の仲間の考えや，異なる立場の仲間の考えを知り，自分の考えを再考した。そして，最終的に「人工知能と積極的に関わっていきたいか，距離を置いて関わっていきたいか」の問いに対する自分の答えをまとめた【図３】。



【図３：生徒Kのカード束。同じ立場の仲間や，別の立場の仲間の考えを知り，思考を巡らせ再考した】

さらに，この単元では再考したことを書いて終わりでなく，全体交流として仲間の前で「初めの自分の考え」→「仲間の考え」→「再考した自分の考え」の一連の流れを大型モニターで示しながら発表することで，交流活動を通しての学びの深まりを実感することができた【写真３】。

【写真３：タブレット画面をミラーリングし，思考の流れを説明している】

本単元では，交流活動による再考学習を主として実践を行った。その結果，**授業に臨んだ３年生生徒全員が仲間の考えを踏まえて再考し，自分の中で結論を出すことができた**。また，**再考する中で新たな気付きを得て，さらにそこから思考し続ける生徒も多く見られた**。本研究で目指す生徒の育成がなされた単元であったと感じる。今後は，本単元を基にしつつ，他の単元でも同様に再考の場を位置付けていきたい。

５．成果と課題

これまで一年間，交流活動を通して自他の考えを広げ深め，多様な視点から思考し続ける生徒の育成を目指し，再考学習を続けてきた。５月に行われた全国学力・学習状況調査の中にある，自分の考えを広げたり深めたりすることに関わる質問を１２月，現３年生抽出学級を対象に行ったところ，次のような意識の変容が見られた。

【目的に応じて文章を読み，内容を解釈して自分の考えを広げたり深めたりしていますか】
・当てはまる　＋　８．７％
・どちらかといえば，当てはまる　＋１１．９％
・どちらかといえば，当てはまらない－１６．５％
・当てはまらない　－　４．２％

本研究で実践してきた「単元構成・題材設定に関わる工夫改善」「タブレット端末を用いた交流活動に関わる工夫改善」により，これからの社会を生き抜く上で必要になってくる「目的に応じて文章を読み，内容を解釈して自分の考えを広げたり深めたりする」力について，「当てはまる」「どちらかといえば，当てはまる」と答えた生徒の割合が増え，「当てはまらない」「どちらかといえば，当てはまらない」と答えた生徒の割合が減る結果となった。

また，今年度行った交流活動についての生徒の意識には以下のようなものがあった。

・タブレットはみんなの意見が一気に見られるところが長所なので，これまで発表のときに当たらなかった人の意見も分かり，学びが深まったと思う。（生徒N）
・全員の意見が分かるから，他人との意見の比較をしながら学びを得ることができた。（生徒O）
・今までは一部の仲間の意見しか見ることができなかったが，様々な人の内容が見られるようになり，選択する力がついたと思う。（生徒P）
・今までよりも仲間の意見が分かりやすくなった。だから，仲間の意見を取り入れて再構築しやすくなった。（生徒Q）

本研究での実践が，自他の考えを広げ深め，多様な視点から思考し続ける生徒の育成につながったと，生徒自身の意識からはっきり伝わることとなった。

研究の対象とした現３年生の生徒は今年で中学校を卒業し，それぞれの進路に向かって進んでいく。そして，この予測困難な社会を切り拓く新時代の担い手として，社会に羽ばたいていくことになる。そのとき，本研究を通して身に付けた**多様な視点から思考し続ける力**が生かされていくことを，教科担任として，そして一人の教員として切に願っている。

最後に，本研究の主題設定の理由にもなった「国語の勉強は好きですか」の質問についても再度調査したところ，次のような変容が見られた。

【国語の勉強は好きですか】
・当てはまる　＋１３．５％
・どちらかといえば，当てはまる　＋１８．２％
・どちらかといえば，当てはまらない－２４．６％
・当てはまらない　－　７．１％

「当てはまる」「どちらかといえば，当てはまる」と答えた生徒の割合が大きく増加し，「どちらかと言えば当てはまらない」と答えた生徒の割合が大きく減少した。国語科教員として，この上ない喜びである。

本実践での成果と課題をまとめると，次のようになる。

【成果】

○多様な視点から考えられる，必然性のある交流活動の設定により，生徒が主体的に単元の学習に臨むことができた。
○タブレット端末を用いて多くの仲間の考えを知ることで，ペア交流や小集団交流以上の様々な視点の獲得につながり，多様な視点から思考し続ける生徒の育成がなされた。
○自分と仲間の考えをつなげ合わせ再考することで，自らの考えの広がりや深まり，変容を実感しながら学習活動を行うことができた。
○ＩＣＴの活用と新たな交流形態により，国語の学習に対する意欲が向上した。

【課題】

▲「初めは～だったけど，○○さんの考えを聞いて～ということが分かった。」のように，別の視点の獲得に留まる生徒が多かった。さらにそこから気付きを得て，新たな考えの構築がなされるような手立てを考えたい。
▲一部の単元に留まらず，多くの単元に本研究の内容を取り入れ，交流活動を通した再考の場の設定を行いたい。

６．参考資料

・黒上晴夫「考えるってこういうことか！『思考ツール』の授業」
・田村学「深い学び」「学習評価」
・文部科学省「中学校学習指導要領（平成２９年告示）解説　国語編」「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料　中学校国語」
・令和２・３年度全国学力・学習状況調査　結果